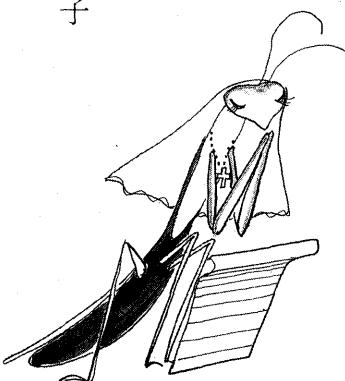


『星の子』が投じる問い

森下みさ子



「星の子」という題は、キラキラとなんとかわいらしく響くことだろう。けれど、オスカー・ワイルドがしたためたこの物語は、その響きに反して、つらく悲しく、心の隅にいつまでも問いをしこらせる。なぜ、星の子はこんなにもつらい旅をしいられねばならなかつたのだろう。しかも、その果てにようやく得られた国から、なぜたつたの三年で逝かねばならなかつたのだろう。

星の子が拾われる場面には、キリスト生誕の情景をしのばせるものがある。ある冬の寒い夜、森で道にはぐれた貧しい二人の木こりの前に、星が美しい光の尾をひいて落ちてくるのだ。二人が駆け寄ってみると、そこには金縛の布に包まれた星の子が、すやすやと眠っている。二人の木こりは光を見て金銀をあてこんでいたのだが、ただの捨子とあって

がつかりする。けれど、そのうちの一人が子どもを哀れんで拾い、育てることになるのだ。貧しい者のもとに、天からもたらされた無垢なるみどり児。星の光とともにきたった赤子は、まるで救世主のように映るのだが、キリストとは正反対に、この子は恐ろしい悪魔の性癖を發揮していく。星のように美しく育った子どもは、村の子どもたちを扇動しては弱い者・醜い者・不具を、徹底していじめるのである。あげくに、実の母親であるという女乞食を罵声とともに追いやつてしまふのだが、このとき、異変が起ころ。星の子は突如蟻蛙のように醜くなつて、今度は自分が追いやつた母親を訪ねて歩かねばならなくなるのである。星の子は、行くさきざきでいじめられる。自分がかつて醜い者たちにしたと同じ仕打ちが、次から次と星の子に浴びせられる。そればかりか、とある町に入るとすぐに魔術師にとらわれ、白と黄と紅の金を探してくるように命じられる。そんなよるべない星の子を助けてくれるのは、星の子に一度助けられたという子兎である。子兎のおかげで三度とも金を探し当てられたものの、星の子は癩病やみに請わると、魔術師の仕打ちも顧みず、その金をあげてしまう。もはや、魔術師に命を奪われるしかないとなつたとき、星の子はきれいな姿に生まれ変わり、人びとの歓呼の声に包まれて王子として迎えられるのである。それでもなお、みずからに罪を悔いて旅立とうとする星の子の前に、女乞食と癩病やみとが現れ、お妃と王に変身をとげる。こうして、星の子はほんとうの両親である王と妃のもとで、情け深く国を治めたという。

星の子の試練は、みずから招いたものとはいえ、あまりにも厳しい。物語であることを差し引いたとしても、一片の救いもないよう感じられる。醜くなつて、行くさきをきでいじめられ、その上奴隸となつて難題を果たさねばならない。物語ならたいてい、ここらへんで救いの手が差し延べられそうなものだ。子兎の恩返しがそれにあたるけれど、いかんせん、これまた癩病やみに金を請われてあげてしまふので、結局手ひどいばつを受けることになる。星の子が救われるのは、最後の最後、みずから命を投げ出して癩病やみを救わねばならないほどに追い詰められてからである。星の子の試練の旅が、母親たる女乞食を探し求めるに始まり、父親たる癩病やみを命と引き換えに救うこと终わるとすると、これは親から与えられた子どもの試練ということになるだろうか。それにしても、なんて厳しい……。

その厳しい試練の原因は、星の子の美しいがゆえの残酷に求められる。星のように美しい子どもは、みずからを愛するあまり、美しくないものを嘲り、からかい、いじめ抜く。そして、周りの子どもたちもこれを止めるどころか、いい気になつて同調するのである。ここにみられる残酷性は、あくまで子どものものであつて、大人が謀る悪事とは別のようと思われる。星の子の美しさに魅せられ、その残酷な命令に喜々として応じるのが子どもたちであるのは、そのせいであろう。子どもの無垢のなかで共有される「美」と「残酷」は、社会がよつてたつ秩序や倫理の手前にあつて、激しく輝いてさえいる。燃える星のよ

うに……。それが星なら、あるいはそのままで許されたかもしれない。けれど、地上に降り立った星の子は、その無垢の場からとびだして苦い経験を積み重ねていかなくては、一人の人間とはならないのだ。厳しい試練という経験を経て、星の子は美しさをとりもどす。けれど、それはもちろん以前の美とは異なる。ワイルドは「これまでなかつたものを、星の子の瞳に宿させていく。「これまでなかつたもの」はおそらく、様々な経験を経た後に得られる、より高くて貴い美の輝きであろう。自己愛を拭い去った後、自己以外のすべてのものに注がれる愛の光でもあろうか。私達はここでようやく、一人の人間の完成された姿に出会うのである。

この話の展開は、「無垢」から「経験」を経て「より高貴な無垢」へというワイルドの思想を表しているともとれるが、私には、私達の文化圏にはなじみの薄い西洋的な人間の成長が説かれているように感じられる。私達の文化においては、これほど徹底して孤独な試練が、話の上とはいえ、課せられることがあるだろうか。第一、無垢なる美しい捨子のなかに、それゆえの残酷性を告発することなどできるだろうか。どうももつと甘やかで穏やかな筋立てを期待してしまってはある。けれど、そんな私の期待を受け付けないばかりか、星の子の話は、さらに恐ろしくも悲しい結末でくくられている。星の子は王子となつて治世して三年後に亡くなり、しかも後継者は悪政をしたと結ばれているのである。子ども向けて書き直された『星の子』では、さすがにこの結末は省かれている。けれ

松本の七夕人形

ど、ワイルドは、この部分も大事な要素として含めて「星の子」の話を仕立てたに相違ない。人間としての完成を経てなお、その苦しみは大きく試練は烈しかつたのだろう。本当の安らぎは、この世を去つて後、神の御元でのみ与えられるのだろうか。いや、それさえも私が見知らぬ文化に寄せてみる甘やかな解釈にすぎないのかもしれない。ワイルドの目はもつと厳しくこの世をみつめ、人の成長をとらえているのではないだろうか。その厳しさは、凍てついた冬の森に落ちてくる一筋の星の光のように、私にはキラリと輝く問いのまま投げかけられている。

(東京学芸大学)

美谷島いく子